

# 松山市教育会情報

発行所 松山市教育会  
 松山市祝谷町1-5-33  
 ☎ 089-933-0354  
 ホームページアドレス  
<http://matsukyoiukukai.main.jp/>  
 発行人 清水 昇  
 責任者  
 編集 調査研究部

## 人生100年を考える



副会長  
小坂 真也



「子規さん俳句かるた」より

松山市教育委員会 編  
 松山市立子規記念博物館 監修

最近、「ライフ・シフト ～100年時代の人生戦略～」という書籍が発刊されたり、政府が「人生100年時代構想会議」を設置したりするなど、様々な場面で「人生100年（歳）」という言葉を見聞きするようになってきました。日本人の平均寿命は戦後から延び続け、人生の長さを表す表現も「人生60年、70年、80年、90年」と変化し、ついに「人生100年時代」が現実のものになろうとしています。これまでの80歳程度という平均寿命を前提に考えられてきた「教育を受ける」「仕事をする」「引退して余生を過ごす」という三つの人生ステージは、今や一昔前のことのようにです。「2007年生まれの子どもの“半数”が到達する年齢（寿命）が、日本の場合は107歳」という推計結果も出ています。人生100年時代は、今を生きる私たちに与えられた「恩恵・特権」と言えると思います。しかし、健康や経済的な面から延長した高齢期の生活に不安を抱えている方も少なくないことも事実です。しかし、不安を抱えながら生活するよりも、何か目標をもって、その実現に向けてポジティブな人生を送りたいものです。映画「最高の人生の見つけ方」（2007年アメリカ）の中では、余命僅かと宣告された高齢男性二人（ジャック・ニコルソン、モーガン・フリーマン）が「やりたいことリスト」を作成し、それを実行しながら残された人生を前向きに過ごしていった姿が描き出されていました。

そこで、この二人と同じように「やりたいことリスト」を作成してみてもどうかと考えています。今はまだ漠然としたものしか思いつきませんが、「ドッグカフェを開店する」「親を旅行に連れて行く」「夫婦で海外旅行を楽しむ」といった個人の夢や「見守り隊の活動に参加する」「授業のお手伝いをする」といった社会貢献活動などが私の候補です。私の知っている先輩や同僚の中にも、「松山市の文化財を調査する」「入学したての小学校1年生のために授業の見守りをする」「大学に入り直す」「英語や韓国語をマスターする」「何か楽器を習い始める」など、様々なことを考え、実践されている方もいらっしゃいます。

これからも同じ夢や志をもった人たちと共に力を合わせて、自分の夢に向かっていろいろなことに挑戦したり、これまでお世話になった教育界や地域に貢献したりすることによって、自分自身が成長し続けながら100歳まで到達できたら、とてもすばらしい人生になるのではないのでしょうか。そして、そのことが、この教育会という組織の役割の一つなのではないかと考えています。

# 平成30年度報賞者

## 松山市教育会



(浮穴支部)  
山田 眞昭 先生  
支部長



(味生第二支部)  
加地 勝重 先生  
監事・支部長



(久米支部)  
白潟 康隆 先生  
理事・副会長



(双葉支部)  
森部 司郎 先生  
事務局長



(姫山支部)  
野本 清 先生  
事務局長



(素鷲支部)  
野本 通弘 先生  
事務局長



(桑原支部)  
藤原 政紀 先生  
事務局事



(石井東支部)  
曾根 道生 先生  
事務局長



(番町支部)  
三好 建次 先生  
事務局長



(味酒支部)  
田丸 耕造 先生  
事務局長



(生石支部)  
森本 久美 先生  
事務局長



(北条支部)  
渡部万美江 先生  
事務局長



(垣生支部)  
玉川 徹 先生  
事務局長・監事



(浅海支部)  
山本 和子 先生  
事務局長

## 「えひめ教育の日」記念事業

## 「まつやま教育フォーラム30」高齢慶祝者(傘寿)名簿

	氏名	支部		氏名	支部
傘寿	栗田陽子様	番町	傘寿	村上伸二様	生石
傘寿	三神美津子様	味酒	傘寿	宇都宮よしの様	石井
傘寿	金子登己江様	八坂	傘寿	大森理様	荏原
傘寿	松平準子様	八坂	傘寿	遠香節子様	たちばな
傘寿	清水透様	清水	傘寿	曾我クリ子様	味生第二
傘寿	大野順廣様	潮見	傘寿	塩梅若菜様	みどり
傘寿	堀井徹様	潮見	傘寿	大森裕子様	みどり
傘寿	野間吉雄様	和気	傘寿	中野清繁様	正岡
傘寿	石丸淳様	和気	傘寿	大石佐和子様	正岡
傘寿	武市敞様	桑原	傘寿	長尾齊様	北条
傘寿	兵頭千恵子様	桑原			

# 思い出の学校

## 松山市立東中学校の思い出

松平 準子 (八坂支部)

昭和56年、松山城二の丸にあった城東中学校に勤務していた頃のことである。学校の規模は、1年3、2年4、3年4の11クラスであった。地域の家庭環境は、単親家庭などが多く、問題を抱えていた。非行に染まる生徒もいて、補導に当たることもしばしばであった。この年は、一年後に御幸中学校と合併することになっていた。井上校長先生指導のもと、スムーズに合併ができるように全教職員で取り組んだことが思い出される。

昭和57年の春、両校の合併が行われ松山市立東中学校が誕生した。国広校長先生を中心に、両校の生徒たちがスムーズに融和できるよう取り組んだ。両校の統合により、生徒数が増加し教室が足りないことになった。

私は1年部に所属することになった。1学年は7クラスに編成されたが、教室が不足していたので、東雲小学校のプレハブでスタートを切ることとなった。しかし生徒たちは、粗末な教室で目を輝かせていたことを思い出す。

2年生3年生は、城東・御幸の気風がなかなか抜けきらなかった。それで、指導には苦勞が絶えなかったようである。自転車で廊下を走ったり教室に入らなかったりする生徒もいて、指導にはずいぶん手を焼いていたようである。私は好きな英語を担当し、1年生と楽しく学習に取り組んだ。

その後、興居島中、旭中の教頭、松山市教育委員会での嘱託として、学籍関係や教育相談に務め今日に至っている。初任者で勤めた道後中学校から、退職を迎えた旭中学校まで生徒たちと共に過ごした日々が思い出される。



## 海外での教員生活

武市 徹 (桑原支部)

私は、アルゼンチンのブエノスアイレス日本人学校に3年間勤務しました。この学校は、小・中学校が一緒で、生徒数は50名足らずの小規模校です。私は中学校の大規模校での勤務が長かったので、驚きと困惑でいっぱいでした。着任最初の職員会議で、担任は中学2年生、教科は中学2年生の社会科と全校生徒の保健体育を受けもたされました。小学校は指導の経験がないので、苦勞の毎日、特に低学年の指導では安全第一としていましたが、ついつい高度なことを要求し、危険なこともあって反省ばかりの毎日でした。しかし、教えてみると低学年ほど上達が早いので、やりがいもありました。野外学習では、広い草原や森林の中をバスは時速100キロ以上のスピードで走り、牛馬や羊の群れを見ながら目的地へ。見学する公園や名所の規模の大きさに感動しました。また、5年生以上でのキャンプで、林の中にテントを張って泊まった時のことです。夜中に近くの道路を2頭の馬が駆け抜けていったので、教師だけ起こし、緊張して成り行きを見守っていましたが、何事もなく走り去っていきまので、胸をなでおろしたこともありました。日曜日には、日本人の会社に勤めている現地の人とサッカーの試合をよくしました。でっぴりとした方が多いのですが、テクニクはなかなかのもの。生徒たちも必死ですがうまくかわされ、負けが多い試合でした。

夏・冬の長期休暇は、何も行事がなく出勤もしなくてよいので、国内外の旅行をし、多くの国の人々や文化に触れることができました。「百聞は一見にしかず」です。3年間でしたが、日本では味わえない多くの貴重な体験をさせていただき、大変ありがたく思っています。何事にもチャンスを逃さず、積極的に取り組むことが大切ではないかと思ひます。思い切って日本人学校を希望したことが私の人生に大変良かったと思ひます。ブエノスアイレス日本人学校の皆様や保護者、日本人駐在員の皆様に深く感謝しています。

## 宿直から始まった！

村上伸二(生石支部)

初任校を訪れたのは、昭和37年4月4日。旧周桑郡丹原町(現西条市)立德田小学校である。紅葉の名所で知られる西山興隆寺の麓にある。木造二階建ての校舎二棟が鍵状に連なるこじんまりした学校で、校長先生、教頭先生が出迎えてくれた。石炭ストーブが赤々と燃えていたのを思い出す。お二人は誠にこやかに迎えてくれ、なおかつ親切であった。新米教員への戒めとか教訓の言葉はなかったように思う。

ところがである。「あなたの住まいが見つからんのよ。そじゃから荷物は学校宛に送るようにしてくれまいか。」との教頭先生の言葉には驚いた。仕方ないので、その通りにし、後日学校に赴任すると荷物は宿直室にあった。4月6日であったと思う。この日から私の勤務が始まった。だから教員生活最初の仕事は、「宿直」だったというわけである。それから一週間近く学校に寝泊まりをした。つまり、連日の宿直生活。食事は「小使いさん」。この当時、学校には小使室があり、そこに寝泊まりする小使いさんがいたのである。

こんな異例の形が始まった教員生活。異例はまだ続いた。悲しく沈痛な事態が待っていたのだ。

私の担任は5年生。32名だったと記憶している。その中に知的障がいの女兒がいた。ニコニコとよく笑うかわいい子だった。その子が夏休みに入ると間もなく亡くなった。一週間ほど後、今度は彼女の母親が命を絶った。時期はずれたが無理心中だった。新卒の教師には心底辛い事件であった。

ところが悲劇は終わらない。同じ夏休み中のお盆の頃、今度は別の女兒の母親が自ら旅立った。物静かで知的な保護者であった。残された女兒のことを思うと胸が痛く、かける言葉もなかった。

初任者には荷の重いスタートであった。同時に、貴重な試練をいただいたスタートでもあった。

## 新採赴任校の思い出

長尾 齊(北条支部)

昭和36年4月、八幡浜市立真穴中学校(学年2、全6学級)に赴任した。学校前バス停に降りると、西の沖合に大島、一面に広がる青い宇和海、東側の坂道を登ると学校があった。小・中学校が隣り合い、運動場と講堂は共用である。民家から離れているが、東側は果樹園の緑に囲まれ落ち着いた環境である。私は、学校に近い穴井地区の海岸にある教員住宅で自炊生活を始めた。時の渡部校長先生は、食生活を心配されていたが、「まあ、学校給食があるから栄養失調にはならないだろうなあ。」と言っておられた。

主な校務分掌は、1年学級担任と理科主任である。先輩に教えてもらいながらの学級経営であったが毎日が楽しかった。教科の指導は、全学年の理科。前任の理科主任の先生と引継ぎが出来ず、しかも新学習指導要領への移行期：移行措置に入っている年度だったので、教科書どおりに進められない单元もあり、悩みながら教科経営をした。その時、愛大附属中での教育実習記録と私用ノート、それに教科書会社から贈呈された見本の教科書が大変役立ったのを今も鮮明に覚えている。

また、中学校では部活動の指導が、肉体的時間的にもかなりの負担になったが、楽しい時間でもあった。放課後の運動場は、中学生がフル活用。男子は野球部、女子はバレーボール部が中心だった。男子のバスケット部を創るか、バレー部を創るか体育主任の田中先生を中心に1年近く検討した結果、運動場を有効に使うには、バレーコートを玄関前でフェンスに併行に造り、男子バレーボール部を創設することになった。この部の担当に私になり指導に当たった。幸運にももち上がった学年の3年夏には市大会で優勝し県大会に連れていくことが出来た。男子のバレーボール部を創って1年ほど経った頃、体育主任の田中先生と男女の部員を引率し八幡浜高校の体育館で、2年後の東京オリンピックで金メダルをとった大松監督率いる日紡貝塚チームの公開練習を見学した。生徒も教師も衝撃的な刺激を受けた面もあるが、その後の練習にそれぞれの立場で活かせると思われる。

## えひめ教育の日 記念事業

## まつやま教育フォーラム 30 講演会

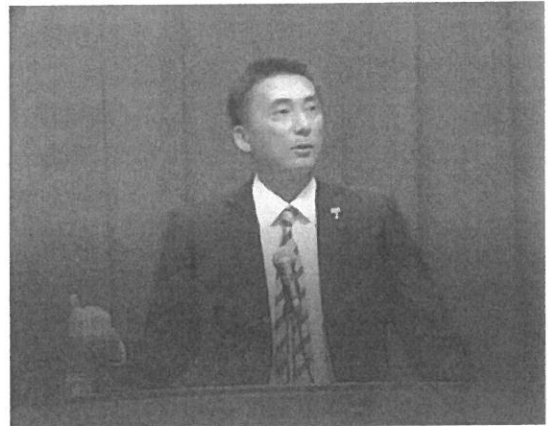
H30.11.10(土) 文教会館にて

## 『2つのプロ野球』～NPB(日本野球機構)と四国アイランドリーグ～

講師 愛媛マンダリンパイレーツ 監督

河原 純 一 氏

愛媛マンダリンパイレーツ監督の河原氏は、神奈川県出身の昭和48年生まれ。平成6年に駒澤大学からドラフト1位で巨人軍に入団し、伸びのあるストレートを武器に先発投手として活躍されました。その後、肩やひじを故障するなど苦難の時期もありましたが、原監督のもと抑え投手として復活し、日本シリーズの胴上げ投手にもなりました。西武、中日、愛媛マンダリンパイレーツと移籍され、平成27年に現役を引退されました。そして、昨年度からは同監督に就任し、今年は、四国アイランドリーグで後期優勝を果たすなど、好成績を残されています。



また、リーグ戦の合間を縫って、小・中学生に体を動かすことの大切さやすばらしさを伝えたり、7月の豪雨被害のボランティア活動に参加したりするなど、選手の人間力の向上やキャリアアップに努められるとともに、地域のスポーツ振興、貢献活動に積極的に取り組んでおられるところ です。

## ◆ターニングポイントは様々な形で現れる(小学校～プロ野球選手誕生までの道のり)

自分はもうすぐ46歳、小学校4年生から42歳までトータル32年間野球をやってきた。そんな中、様々なターニングポイントによって、自分の人生が動いてきたと感じている。

私の父親は、大の巨人ファン、長嶋ファン、家では、巨人戦がテレビで流れている。私も野球が好きで、巨人の江川さん、阪神の小林さんなどのまねごと遊びをする。そういった小学生時代を過ごしてきた。ただ、プロ野球選手になりたいと思ったことはなかった。少年野球チームの監督から「ピッチャーやれ」と言われたのが、自分のピッチャー人生の始まり。「ピッチャーやれ」と言われてなかったら、ピッチャーをやっていないかもしれないし、野球もしていなかったかもしれない。これが第一のターニングポイント。

中学校では、自分は全く有望視されていなかった。ちょっとずつ投げては結果を残すということを繰り返し、3年生では背番号1をもらった。しかし、入学してからの3年間全く勝てず、県大会にすら出られなかった。そして引退、進路選択。私は強豪校の横浜商業高校に進みたいと思っていた。進路相談で学年主任(野球のことは全く知らない)が「お前が行ったってレギュラーになれるわけがないだろう。」と完全却下され、最終的には県立の川崎北高校に進学することになる。ただ、この第二のターニングポイントが、これから先をいい具合に進めていくことになる。

将来は普通の会社員になりたいと思い、川崎北高校では、大学進学のための指定校推薦をもらおうと勉強を頑張った。しかし、学年8番、9番の成績などでは指定校の枠が取れない。あきらめて野球を頑張ることに。神奈川県は、横浜、桐蔭学園、日大藤沢、東海大相模、桐光学園、多数の私立の強豪校がひしめき合っており、県立高校にまず甲子園の道はない。そんな中、「打倒私学」を

合言葉に川崎北高での野球生活が始まった。大会の度にシード校の壁に跳ね返され、そして、最後の夏の甲子園予選。すごくじ運の組合せとなり、だれもが川崎北高の勝利を疑わなかった県立高校との1回戦。ところが、延長戦にもつれ込み、しかも先に1点を取られ万事休す。何とかその裏に2点を取ってサヨナラ勝ち。すると、そこから快進撃が…。神奈川県には野球部が202校あり、8回勝たないと甲子園には行けない。準々決勝では延長16回の激闘を制し第1シードを撃破。準決勝は4-5で競り負けたが、県ベスト4の結果を残して夏の大会が終了。わずか2週間で50イニングを投げ、『ピッチャー河原』の存在を周りが評価。そして、第三のターニングポイントとなる大学野球の雄、駒澤大学に進学することに。駒澤大学では、太田監督のもと初めての専門的な指導。4年間で春と秋のリーグ戦計8回を戦い、4回優勝、うち3回は全国優勝。その実績を買われ、プロ野球全12球団中10球団から1位指名を受け、最終的には巨人軍に逆指名で入団。ここに『プロ野球選手 河原』が誕生した。

#### ◆実践を意識した練習と、小さな成功体験の繰り返しが自信につながる

キャッチボールの基本は「相手の胸に投げる」こと。もちろん、百発百中で投げることはできない。自分もできない。でも、少しでもずれたら失敗、100mを越えた距離であってもずれたら失敗。1回1回の失敗に、次はどう投げるべきかと真剣に突き詰めてきた。その繰り返しが10歳から42歳までずっとやってきた。その気持ちだけはずっと変わらなかった。プロの世界では、狙ったところからボール半個分ずれただけで打たれる。それぐらいプロのバッターはすごい。狙ったところに寸分たがわず投げることができれば打たれることはない。キャッチボールは何のプレッシャーもない、変なところに投げてクビと言われることもない。でも、試合でマウンドに立ったら…、ランナーを走らせるわけにはいかない。逆転を許すわけにはいかない。いろいろなプレッシャーを一人で背負いながら狙ったところに投げるのがプロのピッチャー。普段、気楽にキャッチボールしている選手が緊張した場面で投げられるわけがない。試合の中で活かされない練習なら、それは何の意味ももたない。そういった意識の高い練習をして試合に出場し、成功体験をちよつとずつちよつとずつ繰り返して、どんどん自信を付けていく。

人生の中で、自分の思い通りにならないことはいくらでもある。むしろそういうことの方が多い。自分が思っていないことや予想していないことで翻弄されることが多い。でも、どんな悲運が降りかかろうと下を向いてはいけぬ。そういう時に、どれだけ気持ちを切り替えて前向きに生きていけるか。あれだけ勝てなかったのに、挫折してもおかしくないのに、ずっと続けてこられたのは、小さな成功体験を大事にしてきたから。1試合の中、自分の狙った球が全て投げ続けられたら負けることはない。そうあるように努力を続けてきた。

縁があってこの愛媛の地に来させてもらった。愛媛の野球に貢献できないかと思っている。監督としてもまだまだ未熟で試行錯誤しながら指導に当たっているが、今のこの経験が、これからの何かに役に立つはず。下を向かず前向きにやっていきたい。

#### ◆(講演裏話)

河原氏は、長嶋監督、原監督、堀内監督(ここまで巨人)、伊東監督(西武)、落合監督(中日)のもとプレーをされてきました。講演の中で、長嶋監督の様々な(笑いの!?)エピソードや三冠王を何度も取った落合監督の守りの野球哲学の話、また、巨人軍を選ぶに至った経緯(本当は他にも行っていいなと思う球団があった…)や、駒沢大時代の厳しい寮生活の話(目覚まし時計の音が「リーン」と鳴る前の「カチッ」という音で起きるようになっていたこと等々)なども話してくださいました。ここでは、詳しくご紹介できないのが残念ですが、参加者を笑いに包んだり、うーんとうならせたりするすばらしいご講演でした。

## ブロック紹介

### 第1ブロック 藤本 宣彦

城山周辺の東雲・番町・八坂・味酒・清水・姫山の6支部で構成されているのが第1ブロック。味酒・清水校区以外は会員も少なく、支部単位の活動は難しかった。当時、会員の皆さんも年間の会費を払い、文教月報や行事案内は届くものの、支部としての活動は、年1回の総会・懇親会で、顔を合わせる程度とっていたのではないだろうか。会員名簿を見て、こんな先生方がおられたのかと知るくらいであり、支部会員同士の交流の場はあまりなかった。そこで平成24年、各支部の代表者が集まり、ブロックとしての取組について協議した。大きな輪になれば何かできるのではないかと考え、アンケート調査をしたり、会員の生の声を聞いたりして、活動内容について検討した。そこで決まったのが、年間計画を立て、毎月定期的に楽しい文化財巡りや一日研修旅行をしようということであった。そして、毎月第3水曜日に実施と決定。当日の計画立案と案内係を決め、案内文書は2週間前に配布。さらに電話等でも勧誘する。会の名称は、「わいわい三水会」とした。

第1回は、平成24年4月、東雲支部が担当し、「県立美術館展示見学と二の丸公園散策」を実施した。それ以来、本年度まで毎月続いている。以下、平成30年度の活動を紹介する。

- 【4月】 晴天に恵まれ、11名が参加。新緑に囲まれた小野地区文化財巡り。三熊野神社の鳥居には、米山書の「百禄」「受天」の文字が刻まれている。メーンの葉佐池古墳は、開墾中に偶然発見された古墳時代後期の国指定史跡である。
- 【5月】 春日和に恵まれ11名が4台の車に分乗して出発。標高1,525メートルの大川嶺山頂に着く。なだらか山肌にピンク色の自生ツツジが咲く。今は亡き永井先生から楽しい話を聞く。
- 【6月】 古町駅に16名が集合。今年も希望の多かった福祉施設の見学。衣山の「ていれぎ壮」では、1食345円の当日メニューを試食する。
- 【7月】 地元の森二郎先生から森盲天外の一生について講話を聞く。テレビ局制作のビデオもすばらしい内容だった。
- 【8月】 夏と秋には一日研修旅行を計画。現職の先生方も参加しやすい日程を工夫。愛南町の石垣の里や展望タワー巡りを行った。
- 【9月】 「ぶらぶら美術館・博物館」巡り。子規の「糸瓜忌」講演を聞く。
- 【10月】 「伊台・五明の寺・神社」巡り。昼食はカツオ天井を食す。
- 【11月】 「四国中央市・新居浜市の一日研修」で水引細工や紙すき体験をする。参加者からは、初めての場所を歩き、体験もでき有意義との声をいただく。……（続く）

※ 文字制限や12月締切によりご紹介できませんでしたが、この後も継続実施中とのことでした。

## 活動の様子

### 本年度の文化講座のご案内

福利厚生部

本年度は、五つの文化講座が開かれています。会員の皆さんは、先生方のご指導の下、和やかな雰囲気の中で熱心に受講され、講座を楽しまれています。

#### ●囲碁・将棋教室

第1土曜日の午後に開催しています。18名の会員の皆さんが囲碁や将棋の腕を磨いています。

#### ●俳句交換会

13名の会員さんが、吉田晃先生、近藤良郷先生のご指導を受けながら句作を楽しみ、毎月、交換句集を発行しています。

#### ●ヨガ講座

第2土曜日の午後に講座を開催しています。脇坂恭子先生のご指導を受けて、16名の会員さんがヨガに親しんでいます。

#### ●川柳教室

栗田忠士先生のご指導の下、14名の会員さんが、第3水曜日の午後に川柳作りに励んでいます。

#### ●詩吟教室

月2回、月曜日に教室が開かれています。昨年の全国大会で優勝された伊賀上峰山先生のご指導で、13名の会員さんが活動しています。

ご入会を希望される方、興味をおもちの方は、市教育会事務局までご連絡ください。